

イエスが霊の力に満ちてガリラヤに帰られると、その噂が周り一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から称賛を受けられた。（ルカ福音書4：14～15）

主イエスは、悪魔から試みを受けたが、神の言葉によって撃退された。霊の力に満ちて、ガリラヤに来られ、諸会堂で教え始められた。福音宣教はガリラヤから始まった。主イエスの教えの素晴らしさに民衆は驚き、称賛したので、噂は周り一帯に広まっていった。会堂での礼拝では、ファリサイ派の人々による律法の教えが中心であった。彼らは、律法を強権的に、そして、紋切型に説き、生きる喜びを与えることはなく、律法を厳格に守るように説くものであった。主イエスは自分の言葉で、実存をかけて、神の恵みのリアリティを解き明かした。民衆は、神を見たかのような感銘を持って聞き入ったに違いない。主イエスの人気は人々の間で、一挙に高まった。

マルコ福音書は、ガリラヤでの宣教の始めを下記のように伝えている。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」（マルコ1：14～15）

洗礼者ヨハネは、領主ヘロデが兄弟の妻ヘロディアと結婚したことは律法に反すると抗議したため、ヘロデの怒りを買って、投獄された。ヨハネの投獄後、バトンタッチされるかのように、主イエスの時が来た。ガリラヤに行き、そこで、神の福音を宣べ伝え始めた。その最初の言葉が「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」であった。神が人間に直接かかわる神の国が来た。神が見えず、寒々とした律法による差別管理社会であったが、神が生きて支配する新時代の到来を告げた。悔い改めて、主イエスの語る福音を信じなさいと宣言された。悔い改めるということは、心と体の向きを変える、方向を転換することである。キリスト教の信仰は、心と体を主イエスに向かって整え、聞き入り、従うことである。

マタイ福音書は、ガリラヤでの宣教の始めを下記のように伝えている。「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。そして、ナザレを去って、ゼブルンとナフタリとの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。こうして、預言者イザヤを通して言われたことが実現したのである。『ゼブルンの地とナフタリの地 / 湖沿いの道、ヨルダン川の向こう / 異邦人のガリラヤ / 闇に住む民は / 大いなる光を見た。死の地、死の陰に住む人々に / 光が昇った。』 その時から、イエスは、『悔い改めよ、天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた。」（マタイ4：12～17）

主イエスは、ヨハネが投獄された後、故郷ナザレを去り、昔、ゼブルン族とナフタリ族が嗣業として受け継いだガリラヤ地方に行き、ガリラヤ湖畔のカファルナウムに住まわれた。カファルナウムは、弟子になったペトロの出身地である。著者ルカは、主イエスのガリラヤ宣教はイザヤの預言の実現と捉えている。イザヤは「先に、ゼブルンの地とナフタリの地は / 辱められたが / 後には、海沿いの道、ヨルダンの向こう / 異邦人のガリラヤに栄光が与えられる（イザヤ8：23b）」と語っている。ガリラヤの地、闇の中に住む者に、死の陰の地に住む人に日が昇り、光が差し込んだと、神の福音が啓示される新時代の到来を告げている。主イエスは「悔い改めよ、天の国は近づいた」と宣教を始められた。マタイ福音書はマルコ福音書を継承している。